

**第6回北海道集落総合対策事業幌加内町（母子里地区）地域協議会  
母子里地区地域づくり協議会（議事要旨）**

■開催日時

平成26年5月20日（火） 18:00～21:00

■開催場所

幌加内町母子里コミュニティセンター研修室

■出席委員等

<委員>

多田会長、橋本委員、日野委員、若山委員、渡来委員、岡本委員、  
小野田委員、蔵前委員

<幌加内町>

総務課 宮田補佐

<事務局(北海道)>

総合政策部地域づくり支援局地域政策課 西田主幹  
上川総合振興局地域政策部地域政策課 堤課長、有本係長

■開催概要

1 挨拶

**西田主幹**：この3月に、母子里地区のめざすべき将来の姿や、今後の取組の方向性などをまとめたところであるが、本年度はこの取りまとめ結果をもとに、本協議会が中心となって、具体的な取組を進めていきたいと考えている。本日の会議では、前回の会議で説明した総務省の「過疎集落等自立再生対策事業」を活用した取組を中心に意見交換をお願いしたいと考えている。この事業については、総務省の締め切りの関係上、すでに5月上旬に役場から道を経由して総務省に実施計画書が提出されているが、その内容としては、昨年度の本協議会でとりまとめた方向性を踏まえたものとなっている。ただ、この実施計画書は、細かい部分を除いた大まかな内容となっており、具体的な取組内容などについては、皆様からご意見をいただき、決定していかなければならないので、本日も皆様による活発な議論をお願いしたい。このあとの進行は、多田会長にお願いする。

**多田会長**：数日前に名寄のスーパーに出かけたところ、品物の値段がかなり上がっていて驚いた。特に輸入品などは円安と消費税の影響かと思われる。年金で暮らしている方はかなり大変である。こうした状況下では、やはり皆で色々なものを分かち合って暮らしていくことが必要ではないかと改めて感じたところ。今週の土曜日に、

新しく来られたご家族の歓迎会を、このコミセンで予定しているが、地元の山菜を天ぷらにして食べるなど、あまりお金をかけないで、皆で楽しめればと思っている。地域の資源を活かすといった点で、本日、笹の葉茶を持参しているが、これは、昨年の秋に採ったものを乾燥させて作ったものである。上手に加工できれば、意外と美味しく飲めるので、試飲していただければありがたい。もうひとつ、シフォンケーキも持参しているが、これは、キハダの実が入ったもので、少しほろ苦く、胃腸に良いと言われている。

さて、本年3月に取りまとめた「母子里地区の将来に向けて」については、4月7日に町長にお会いし、内容を説明したところ、町から全面的な協力をいただけることとなった。町長からは、地域おこし協力隊に関する取組のほか、特に、山菜に関する取組については、地元のそば屋に卸すことも検討してみてもどうかと前向きなお話もいただいたところ。本日の会議では、この3月に取りまとめた結果を基本としながら、町から総務省に対して提出された「過疎集落等自立再生対策事業」の内容について意見交換を進めていきたい。前段で、西田主幹の話にあったとおり、この事業の実施計画の中では、基本的な枠組みについてのみ記載しており、具体的な取組内容など詳細は、本日のこの協議会で決めていきたいので、各委員の皆様から色々のご意見をいただきながら、ひとつずつ整理していきたい。

## 2 議事

### (1) 平成26年度取組について

※小野田委員より、資料1及び2に沿って説明

#### <意見交換>

#### ◆過疎集落等自立再生対策事業（全体）

**多田会長**：それでは、意見交換を進めていきたい。進め方としては、資料1の右側の中段にある4つの事業について、皆様からご意見をいただきたいが、まずは、全体を通して、何かご質問などがあればお受けしたい。ただ今の説明にあったとおり、ここに掲げる全ての取組を実施しなければならないといったものではなく、金額についても、現時点における役場の試算であるので、あらかじめご承知おき願いたい。

**若山委員**：この事業計画が採択されたとしても、冬は活動が限られることから、実質的に活動できる期間が2～3ヶ月しかない。必ず本年中に実施しなければならないのか。

**小野田委員**：まだ申請の段階であり、正式に採択はされていないが、今後、採択された場合、実質的には7月以降に取り組むこととなる。地域おこし協力隊については、7月から入っていただけるよう、現在、募集しているところであるが、当初の予定どおり進まなければ、取組がさらに後ろにずれ込むことも想定される。いず

れにしても、この事業は本年度1年間限りとなっており、来年3月までに事業を終える必要がある。ご指摘のとおり、短期間で取り組んでいくこととなるが、旭川大学や北大演習林のご協力いただきながら取り組むものもあるので、本協議会での対応が困難な部分など、できるだけ緩和していく方向で進めていきたい。そうした中で、昨年度より本協議会で議論された内容に沿いながら、ひとつでも、ふたつでも、具体的な取組に繋げていきたいと考えている。先ほど、多田会長からもお話のあったとおり、この事業の具体的な内容については、本協議会での話し合いを進めていく中で、適宜、修正を加えていければと思っている。

**若山委員**：この事業を、事実上8ヶ月の短期間の中で取り組むとのことであるが、1千万円もの経費を投じて取り組む事業としては、拙速であるように思う。外部に委託してまで取り組むものも盛り込まれているが、もう少し内容を吟味していく必要があるのではないか。公費を投じて取り組むのであれば、ただ楽しいだけではなく、目標を決めて、しっかりと取り組んでいくことが大切であると考えている。取り組むべき課題の中には、長い年月を必要とするものもあるので、この8ヶ月の短期間の中で経費を投じてまで取り組むのはどうかと思う。

**小野田委員**：地域おこし協力隊による活動が3年間と限られている点から考えても、ご指摘のとおり、しっかりと時間をかけて考えていくのが望ましいが、取組を進めていくためにはどうしても財源が必要である。昨年度からの本協議会での議論を通じて、少しずつ動き始めてきたところでもあるので、本来であれば、具体的な内容をもう少し議論する時間がほしかったところであるが、スケジュール的にも難しく今回の申請となった。今後、この事業が採択されれば、先ほども申し上げたとおり、具体的な取組を進める際に、細部にわたっての再検討が必要であると考えている。

**橋本委員**：これまでの議論を通じて、色々と取組が挙げられているが、まずは、自治区の住民の方々にも話を聞いてみる必要がある。その上で、できることと、できないことが、明らかになってくるのではないか。自治区内でもできることもあるが、北大や旭川大学、「よるべさ」など外部の方にご協力をいただかなければ難しい部分もある。短期間での取組となるが、まずは取り組んでみて、実施できなかった部分については、継続して取り組んでいくことでよいのではないか。

**若山委員**：この事業は、単年度事業とのことであるが、次年度も申請することは可能か。

**西田主幹**：前年度と同じ内容での申請は原則できないなど一定の制約はあるが、基本的には制度上可能である。申請時期として、これまでの例では、4月頃募集の当初予算と、1月頃募集の補正予算の2パターンある。ただ、総務省も、この事業をいつまで実施するかは明言していないので、来年度も本年度と同様に予算措置されるかどうかは現時点では不透明である。

**若山委員**：この「過疎集落等自立再生対策事業」以外にも色々と補助事業などがあると思うが、今回、この事業を活用した理由は何か。

**西田主幹**：事業の実施主体が本協議会となっており、住民参加型の取組といった点を踏まえた場合、この「過疎集落等自立再生対策事業」が最も適していると思われる。また、経費の10割が措置されるなど、非常に手厚い国の支援制度となっている。

#### ◆高齢者支援事業

**多田会長**：色々ご意見もあるかと思うが、全体的な部分での議論はこの程度として、事業の具体的な内容について、少し議論を進めていきたい。本日の会議では、細かい部分まで詰めていくのは時間的にも難しいかと思うが、資料にある4つの事業について皆様からご意見をいただきたい。まず、高齢者支援事業として、アンケート調査の結果などを踏まえ、生きがいつくり活動として、買い物や温泉などへのお出かけが挙げられているが、実際のところ、それほど切実な問題となっていないように思われ、優先課題としては少し疑問のあるところ。具体的な取組としては、バスなどを借り上げ、年間、数回程度の「買い物ツアー」のようなものが想定されるが、もう少し工夫し、別の取組を考えてみてよいかと思う。「温泉ツアー」についても、現在ある老人クラブでも過去に企画しているが、参加者が少なく中止になった経緯もある。

**蔵前委員**：私も同様の考えである。そもそも、ここに掲げられている高齢者支援事業の取組を担うNPO法人として「よるべさ」を立ち上げたところ。この事業の取組内容と「よるべさ」の活動内容とが重なる部分について再考すべきではないか。

**小野田委員**：高齢者支援事業の経費の具体的な内容であるが、賃金と車輛リースなどを計上しているところ。賃金については、買い物や温泉などお出かけツアーの引率者の賃金であり、ツアーを実施する場合、高齢者の方を引率することとなり「よるべさ」のスタッフなど専門的な技術を持っている方をお願いする必要があるので、そのための経費と考えている。このほか、車輛のリース代を計上しているが、こうしたツアーでの利用のほか、地域おこし協力隊が高齢者支援を含めた様々な活動をするための交通手段としての活用も考えている。

**多田会長**：このほか、高齢者支援事業では、サロン活動として、お食事会などが挙げられているが、自治区内でも、昨年1月から数回程度実施している。これは、自宅にある余り物などを持ち寄り、あまりお金をかけないで実施してきたところであり、この事業で経費を投じて実施するのは好ましくないように思う。私としては、高齢者支援事業として、例えば、交通手段を持たない高齢者などが名寄市に買い物に行き、バスに乗り遅れて帰って来られなくなった場合などの「お出迎え」の仕組みを

作ってみてはどうかと考えている。ツアーの開催やお食事会より、こうした取組の経費を厚くしたほうがよいように思うがどうか。

**若山委員**：道のモデル事業では、母子里地区は高齢化モデルでもあるので、この高齢者支援事業の取組自体は理解できる。まずは、どういうニーズがあるのかをきちんと把握する必要があると思う。高齢者の方に喜んでもらうためにも、この辺のところをしっかりと押さえていかないと、せっかく取り組んでも、的が外れていれば意味がない。

**橋本委員**：実際に、高齢者の方からお聞きした話では、率直なところ、買い物支援については、あまり求めていないようである。ただ、出かけた際に、近隣に住んでいる自分の子どものところや、親戚のところ立ち寄りたいたが、交通手段がないといった面で困っているようである。これまでは、運転できる近所の知人をお願いしていたようであるが、最近では、そうした方も高齢となり、お願いしづらい状況とのことであった。そういう意味では、この事業を活用した移送サービスの取組は、高齢者の方に非常に喜ばれるのではないかと思う。また、買い物支援についても、当面はあまり困っていないが、今後、さらに高齢化が進み、動けなくなった場合など、将来的には必要となってくるので、何らかの対策を考えていく必要がある。

**日野委員**：先ほど「よるべさ」の蔵前代表より、高齢者支援の取組が重複するとの話があったが、内容を工夫して、重複しない形での取組を考えてみてはどうか。例えば「よるべさ」の活動と重複しない部分の移送サービスでもよいかと思う。老人クラブでも、会合の食材の買い出しなどの際に、買い物に行きたい高齢者を同乗させる取組を始めたいと思っている。

#### ◆地域交流イベント

**多田会長**：次の、地域交流イベントの議論に移りたい。具体的な経費の内容について、先ほどと同様に、小野田委員より説明をお願いしたい。

**小野田委員**：地域交流イベントの事業の経費の具体的な内容であるが、イベントの運営として47万円、PR経費として40万円ほど計上しているところ。このほか、送迎用のバスの借上料として30万円、イベントガイドなどの講師謝礼として10万円、除雪ツアーの際のスコップの購入など消耗品として15万円、会場は北大演習林の施設などの活用を考慮しており、その経費として9万円ほどを計上している。また、食糧費として8万円ほど計上しているが、交付金の対象外となる可能性が高い。取組を具体的に進める際には、イベント会場などでの協力を北大演習林にお願いし、運営部分の協力を旭川大学の学生にお願いできればと思っている。

**多田会長：**どのようなイベントが必要なのかをきちんと考えていったほうがよい。まず、この地域交流イベントについては、旭川大学からの声かけにより、住民と交流する機会を設けることとなったのが発端であり、本年1月に、自治区で役員会を開き、どのような交流がよいか色々と話し合った結果を旭川大学に伝えたところ。その際色々と挙げられたアイデアの中に除雪ツアーや写真ツアーといった話があったが、これらは一過性の取組に終わる可能性もあるので、取り組むにしてもあまり経費をかけずに、別の取組に充当することを考えてみてはどうか。

**小野田委員：**今後、本協議会での議論の結果を踏まえ、取組内容の一部を見直すことは可能である。計上している経費についても目安と考えていただいて差し支えない。なお、この事業計画は、あくまでも町が企画したものではなく、本協議会での議論の結果を踏まえて、それを町が事業計画の中に落とし込んだものであるため、その点を、再度、確認のため申し添えておく。

**若山委員：**幌加内町でも、例年「そば祭り」を開催しているが、これも、いわば地域交流イベントのひとつと考えるが、果たして、このイベントが移住や定住につながっているのか疑問である。例えば、この事業で挙げられている写真ツアーなどを実施したとしても、本協議会で目標としている移住者の増加にはつながらないと思う。最初のステップとして、母子里地区をよく知ってもらうための取組としてはよいが、その次のステップとして何をするのがはっきりとしない。最終的な目標としては、取り組んだ結果、何回かこの地に足を運ぶことにより、この母子里地区に住みたいと考える方が何人いるかである。そのためには、写真好きの方など、ある程度ターゲットを絞って、少しでもここに住みたいと考えている方に対してPRしていくほうが効果的であると考え。この間、ホームページで見た他の地域の事例であるが、主に首都圏で活動している会社の企画で「ねぶた祭りを作るところから体験しませんか？」という紹介ページがあった。これを見て参加する方は、それが好きで参加するため、当然、自腹を切っても参加することになる。この取組を例にとっても外部から人を呼び込むのであれば、春夏秋冬がはっきりしているこの母子里の良さをPRするためにも、一年間を通じて取り組めるような、例えば「暮らし体験」や「仕事体験」のような取組がよい。自腹を切っても参加するような魅力のある企画が必要である。自前での企画が難しい状況であれば、こうした企画会社に依頼してみるのもよいと思う。

**小野田委員：**専門的なアドバイスが必要とのことであれば、まずは、旭川大学に相談してみるのがよろしいかと思う。場合によっては、こうした企画に精通している方を別に紹介していただくこともお願いできるかと思う。

**多田会長：**幅広く人を集めていくか、ターゲットを絞って人を集めていくか、要するにターゲットの問題である。時間とコストの制約があるが、その両方を求めるのか、どちらか一方にターゲットを絞るかを選択していかなければならない。

**橋本委員**：そもそも、この地域交流に関しては、旭川大学の学生たちの発案であるので、何とか実現していきたいが、イベント開催に当たって、住民の負担が重くなるような状況であれば、役場や大学などの支援がないと難しい。

#### ◆地域資源発掘・活用事業

**多田会長**：次の、地域資源発掘・活用事業の議論に移りたい。具体的な経費の内容について、小野田委員より説明をお願いしたい。

**小野田委員**：地域資源発掘・活用事業の経費の具体的な内容であるが、これまでに本協議会で議論のあった山菜資源のマップづくりについて、パソコンやデジカメなどの経費として70万円、山菜料理レシピについて、保存方法や料理方法などを専門とされている方が旭川大学にいるとのことであるので、その委託経費として50万円、また、地域資源の発掘に関する著名な専門家をお招きしての講演会の実施に当たっての講師謝金として100万円、このほか、活動費として旅費などを25万円と、ホームページ作成の費用として25万円ほどを計上している。

**橋本委員**：地域資源の山菜に関して言えば、実際に住んでいる我々もわからない貴重な山菜もかなりあると思う。毒素の強いものもあるので、これを機会に勉強するのもよい。

**多田会長**：山菜マップについてであるが、これは貴重な情報でもあり、作った後の活用方法が問題となる。広く一般に配付する考えはあるのか。

**小野田委員**：一般向けの配付は考えていない。まずは、地域の方々の資源開発のための資料として作成していきたいと考えている。

**多田会長**：山菜マップを作成するとした場合、私のほうで、すでにかなり情報を持っている。また、一般向けに配付しないのであれば、あまり経費を必要としないのではないか。

**日野委員**：以前から言っているが、母子里地区の鳥瞰図を作るのはどうか。熊の問題や、山菜の自生地把握など、色々と活用できる。

**小野田委員**：山菜など、山野資源を保護していくといった観点では、地域の方々にもきちんと情報を伝えていくことが必要である。そのためのマップづくりであるので、ご理解いただければと思う。

**多田会長**：まずは、この地域の目標として、自立していくことが必要であるとする。地域に担い手がないという課題があり、地域として自立していくための手法として、地域おこし協力隊を受け入れていくこととし、その後、こうした地域おこし協力隊が地域に定着するためには仕事が必要であることから、そのための手法として、地域資源である山菜を活用した仕事について検討していくこととしたところ。山菜に関する取組については、地域おこし協力隊だけではなく、山菜を採りにいけない高齢者の方を巻き込みながら、山菜を採りにいく者、山菜を加工する者など、地域の皆で役割分担しながら取り組んでみるのもよい。山菜マップは、こうした取組のための情報として活用するのであれば、地域の方々にも恩恵がある。

**小野田委員**：山菜は採れる期間がかなり短い。新鮮なものは販売できる期間に限られることから、例えば、山菜レシピなどを開発し、上手く加工できれば、保存も効くので、それを商品化し販売することで、ひとつの仕事が生まれる。そのためのレシピ開発とを考えていただければと思う。また、これ以外にも、山菜は調理方法が難しく、もらっても食べ方がわからない方も多いので、こうしたレシピがあれば、だれでも美味しく食べることができ、山菜を食べる方の裾野を拡げることできる。

**橋本委員**：スーパーなどで販売している外国産のタケノコなどは安価であるが、国産の地物のタケノコなどは高級食材である。山菜に取り組むのであれば、その加工の仕方や販売方法などを、我々もしっかりと勉強していかなければならない。

**多田会長**：この山菜レシピの作成について、旭川大学に協力を求めるとのことであるが、一般的な調理方法や保存方法であれば地域の方でもある程度は解る。また、ネットで検索すれば、かなりの情報を気軽に入手できるので、我々だけでも作成は可能であるように思う。母子里地区で資源として多いのは「笹」であり、「イタドリ」であり、「ワラビ」である。旭川大学に協力を求めるのであれば、むしろ、「笹」や「イタドリ」といったあまり知られていない地域資源の活用方法などを考えてもらうほうがよいと思う。このほか、外部から講師を呼んで講演会を実施するとのことであるが、この地域のことは、地域の方々が一番よく知っており、地域の方々でしっかりと考えていくべき。外部講師による講演会はあまり必要性が感じられない。

**若山委員**：これまでに出ていたアイデアで「山スキー」に着目した取組があったかと思うが、例えば、ルートの開発や、山小屋の設置などといったものを、地域資源として発掘していくといった取組もおもしろい。春や秋には、山菜などを中心としながら取り組み、冬期間に取り組むもののひとつとして捉えて、こうした地域資源を活かした取組を企画立案していくのはどうか。

**日野委員**：周辺の山々を一望できる場所もあるので、母子里地区の優れた自然を活かしていくといった観点では、非常におもしろい。



**小野田委員**：山に関するインストラクターなど、専門的な知識を持っている方に来てもらい、色々とアドバイスをいただくとよいと思う。山菜に限定した専門家となると人材が限られてしまう。

**西田主幹**：先ほどの若山委員のご提案であるが、ここ母子里地区では、あまり奥地まで入らなくても「山スキー」を楽しむことができるなど、他の地域ではあまり見られない恵まれた自然環境があるので、こうしたものを外部の方々に広く知らしめていくといったことは大事である。

**若山委員**：「山スキー」だけではなく、「スノーシュー」や「スノーハイク」といったものもおもしろい。

**西田主幹**：「スノーシュー」や「スノーハイク」となると、どのような景色を見せていくかといったルート開発が必要になる。その辺のところは、多田会長など、地域のほうがよくご存じかと思う。

**多田会長**：この母子里地区周辺の山々は、少し規模が小さいので、その点では、中高年の方向けにちょうど良い規模であると思う。雪質も良いほうで、天候も比較的安定している。遠方まで足を伸ばすこともできるので、その中継基地として、山小屋を設けるといったことを考えてみてもおもしろい。現在、計画にあるトレーラーハウスを現地まで運んで活用するのもよい。

**日野委員**：朱鞠内湖を一望できる場所もあり、名寄、風連、美深など周辺の山々も望むことができるので、非常に景観は良い。

**多田会長**：ただ、こうした取組を進めるにしても、母子里地区に宿泊施設がないため、地域への経済効果があまり期待できない。

**若山委員**：いずれにしても、そうした地域資源の活用に関する取組について、この事業に盛り込んでいくことでよいのではないか。

**橋本委員**：朱鞠内湖の魚に関する取組はどうか。

**多田会長**：関係者に色々とお聞きしているが、ビジネスとして成立させるのはかなり難しい状況である。ただ、河川でのフィッシングについては、一考の余地がある。のんびりと釣りを楽しみたい中高年向けのメニューを用意すれば、ある程度の釣り人が集まるかもしれない。湖と異なり漁業権が設定されていないので、漁協との調整は必要であるが比較的に取り組みやすい。他の地域ではかなり奥まで入らないと釣れないが、この母子里地区では、川釣りについても非常に環境が良い。

**若山委員**：山菜以外にも、色々とアイデアも出てきたので、まずは、取り組んでみて、その後はどうするかを考えていくことでよいのではないかと。

**多田会長**：先日も、山菜を採りに行ったが、やはり、この母子里地区は、山菜に関する環境が非常に良い。かなりの量が採れるほか、他の地域では斜面にある「行者にんにく」も、ここでは平らなところに沢山ある。笹を刈るなど、きちんと管理すれば、一定量の山菜が確保できると思う。今後、地域おこし協力隊が入ってくるが、こうした山菜の管理に取り組んでもらえれば、その後の取組にも活かせると思う。

#### ◆地域コミュニティ活性化事業

**多田会長**：次の、地域コミュニティ活性化事業の議論に移りたい。主な内容としては、地域おこし協力隊を受け入れるほか、交流拠点としてトレーラーハウスを整備していくというもの。ただ、トレーラーハウスは金額的にも大きいので、他の方法などについても検討していく必要があるように思う。また、地域おこし協力隊については、すでに募集が始まっており、月額16万6千円の報酬とのことであるが、金額の多寡など、この辺のところでご意見等はあるか。

**渡来委員**：仕事の内容にもよると思うが、妥当な報酬かどうかは判断がつかない。

**小野田委員**：報酬については、税金、社会保険料その他を控除したら、手取りで13万円前後になるかと思う。家財道具などはある程度用意しているが、このほか、家賃として1万円の負担が生じるほか、冬期間の暖房代も結構かかるかと思われる。

**若山委員**：地域おこし協力隊に関する手当など、他の地域の状況をみても、やはり、家賃などは、手当すべきと考えるがどうか。

**小野田委員**：現在、住居として提供できる物件が公営住宅しかなく、この場合、個人と町との賃貸契約になることから、公営住宅のルール上、一定の個人負担が生じるのはやむを得ない。

**若山委員**：募集要項を見て感じたが、募集対象となる都市地域に関する記述について、もう少し詳しく掲載したほうがよい。他の市町村の募集要項をみたところ、例えば、現在居住しているところが都市地域であることが条件となっているが、苫小牧市や室蘭市、滝川市など、札幌市以外の市町村名も丁寧に記述されている。一般の人にはわかりにくい表現なので、工夫が必要かと思われる。

**小野田委員**：ご指摘に点については、持ち帰って別途検討する。

**若山委員**：応募があった場合の選考方法はどのように考えているのか。

**小野田委員**：面接をする予定であるが、その場合、本協議会のどなたかに同席いただきたいと考えている。

**若山委員**：交流拠点についてであるが、トレーラーハウスやスーパーハウス等ではなく、今あるコミセンを活用することで良いのではないかと。主に地域おこし協力隊が活動するための拠点と思うので、別に拠点を設けるよりも、このコミセンを拠点としたほうが妥当と考える。むしろ、地域おこし協力隊が地域に定住するための施設として、地域にある空き家を改修した活用方法などを考えていくほうがよいと思う。

**日野委員**：コミセンを活用する場合、用途の問題などもあり、役場としても難しい部分があるのは理解するが、柔軟な対応をお願いしたい。

**小野田委員**：コミセンの所管が教育委員会のため、持ち帰って相談する必要があるが、基本的には可能であると思われる。ただ、別の用途で利用している部分もあるので色々と調整は必要である。また、トレーラーハウスについていえば、そもそも地域おこし協力隊の活動拠点以外にも色々と活用していく考え。例えば、山菜などの販売や、地域の方々が交流できるスペースとして使っていただけるようなものをイメージしている。

**若山委員**：いずれにしても、時期尚早のような感じがする。まずは地域おこし協力隊が入ってきて、このコミセンを拠点として活動しながら、その後の取組を考え、仮に拠点整備が必要となれば、その段階でトレーラーハウスやスーパーハウスなどを整備していくことでよいと思う。また、先日、名古屋大学の関係者と話をする機会があり、具体的に決まった訳ではないが、将来的に母子里観測所で勤務する職員を引き上げることを検討しているとのことであった。そうした場合、現在ある名古屋大学の研究施設が遊休化する可能性があるため、地域で活用するのであれば、当該施設の町への移管など、役場から名古屋大学側に対して働きかけていく必要があるのではないかと。また、職員は引き上げるが、施設を無人化して存続することとなった場合には、除雪など施設管理をどうするかといった問題がある。

**小野田委員**：大変、貴重な情報である。役場としても考えていく必要があるため、持ち帰って検討したい。

**多田会長**：いずれにしても、他の取組を含め、この協議会での議論だけではなかなか進まないため、別に組織を設けて進めていくことも考えていきたい。今後、地域おこし協力隊も入ってくるので、その都度、道や役場から職員に来ていただくのでは、スケジュール調整が必要となるなど機動的に進めるのは厳しいと思われる。

**若山委員**：ひとつの提案であるが、多田会長に集落支援員として活動していただくことはどうか。地理的にも役場と離れているので、地域と役場との間を取り持つ中間的に役割を担っていただければありがたい。地域おこし協力隊と集落支援員の両方を配置するのはどうか。

**多田会長**：2～3年後は別としても、現時点では集落支援員は必要ないのではないかと。先ほどの別に組織を設ける話に戻るが、私や小野田委員などを中心に地域で実際に活動できる方などで実働部隊を組織し、決めるべき事項が出てきた場合には、本協議会で意志決定していくということで進めていくのはどうか。

**日野委員**：具体的に進めていくとした場合、これまでの議論や取組内容などを、地域の方々のコンセンサスを得ていく必要がある。実際のところ、地域の方々は本協議会で議論されている内容をあまり知らないと思う。

**多田会長**：あまり細かい内容までは必要がないかと思われるが、これまでに決まった主な取組内容など大まかな方向性などは、地域の方々に説明する機会を別に設けたいと考えている。

**橋本委員**：まずは具体的に進めていくことが大切である。老人クラブなどの機会を通じ、必要に応じて、適宜、説明していくことでよろしいのではないかと。

**多田会長**：道のモデル事業を実施している他の地域では、どのように進めているのか。

**西田主幹**：占冠村では、地元で活動しているNPO法人に委託しているものと、役場が中心となって取り組んでいるものがある。実際に受け皿となるNPO法人などがあれば、こうした手法でもよろしいかと思う。また、先ほど話しにあった実働部隊といった点では、深川市の納内地区では、これから組織を立ち上げる方向で検討が進められているところ。ただ、この母子里地区とは人口の規模もかなり違うので、その辺のところは考慮する必要があるかと思う。

**小野田委員**：地域おこし協力隊が中心となって取り組むにしても、入ってきた当初は、かなり戸惑いもあると思われる。まずは、本協議会の方々のうち、実際に活動していただける方々で実働部隊を設け、そこに地域おこし協力隊の方にも加わっていただくことでよろしいのではないかと。

**多田会長**：いずれにしても、現時点での人選はなかなか難しいので、まずは本協議会のメンバーを中心に有志で一度集まっていただき、取組の具体的な内容や、今後の組織のあり方などについて話し合う場を設けたい。本日お越しいただけなかった北大雨龍研究林の吉田林長や、旭川大学の犬野准教授にも声をかけてみたい。

**小野田委員**：旭川大学との連携については、役場でも具体的に動き出しているところ。  
今後、具体的な取組を進めていく段階においては、旭川大学の協力が非常に重要な要素でもあり、この6月には、旭川大学と幌加内町との間で、正式な協定を結ぶ方向で進んでいる。

**西田主幹**：本日の会議で、各種ツアーの企画などが話題となっていたが、この母子里のファンを増やすといった視点からの取組が必要ではないかといった意見があったかと思う。また、こうした視点とは別に、この母子里に住んでいただくための取組も必要であると思うので、特に「雪」や「寒さ」の厳しい冬期間に実際に住んでいただく体験ツアーなどに取り組んでみてもおもしろい。こうしたツアーの企画は、地域の方々だけでは難しい部分もあるので、旭川大学への協力依頼や、専門の旅行会社などに委託することを考えてみてもよいかと思う。このほか、講演会の実施の可否についても議論となっていたが、地域の資源を活用したコミュニティビジネスの起業など、こうした取組を専門とする方のお話を、直接お聞きする機会を設けることも、取組の一つとして必要であるように思う。

**多田会長**：議論の尽きないところであるが、この辺で会議を終了したい。次回は、本協議会とは別に、近日中に有志での話し合いの場を持ちたいのでよろしく願います。  
本日の会議はこれで終了する。※6月2日18時開催予定

～ 閉 会 ～